様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 3 月 31 日現在

機関番号：32718
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2012
課題番号：22520512
研究課題名（和文）　学習英文法の歴史的研究

研究課題名（英文）　A Historical Study on School English Grammar

研究代表者
中村　捷（NAKAMURA　MASARU）
東洋英和女学院大学・国際社会学部・教授
研究者番号：20004088

研究成果の概要（和文）：日本の英語教育に多大な影響を与えた明治・大正・昭和の日本の伝統的英文法を精査し、その特徴を現代の英語教育に生かす方途を探った。取り上げた文法書は斎藤秀三郎『実用英文典』(明治 31-32 年)、細江逸記『英文法汎論』(大正 6 年)、市河三喜『英文法研究』(大正元年)であり、その内容をまとめると共に、そこで取り扱われている内容とその記述方法、文法概念の適切さ、練習問題の特徴などの観点から詳細に吟味し、それを現在の学習文法と比較検討し、現在の学習文法の構築に生かす方途を探った。

研究成果の概要（英文）：Some of the most influential English grammar books of Japanese scholars' authorship have been scrutinized and the way to make use of them has been proposed. The grammar books that have been taken up are *Practical English Grammar* by Hidesaburo Saito, *An Outline of English Syntax* by Itsuki Hosoe, and *Studies in English Grammar* by Sanki Ichikawa. These books, all of which are now out of print, are considered to be the most important and influential grammar books of Japanese authorship. The contents and the characters of these books have been closely examined, compared with those of grammar books of today, and the way to make good use of the merits of these traditional grammars in constructing new school grammars has been investigated.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	600,000	180,000	780,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学、英語学
キーワード：学習文法・伝統文法

１．研究開始当初の背景

最近日本における英語の受容過程に関する著作がいくつか刊行されている。例えば、英語の受容過程と英語講座の誕生について論じた『英語講座の誕生』(山口誠、講談社選書、2001 年)、過去 100 年間の日本人と英語の関わりについて論じた『日本人と英語―もう一つの英語百年史』(斎藤兆史、研究社、2007 年)、日本の英語教育史を特に英語教科書の観点から論じた『日本人は英語をどう学んできたか―英語教育の社会文化史』(江利川春男、研究社、2008 年）などの優れた論考

が刊行されている。これらの研究は、過去における英語の受容の歴史を、ラジオ放送などのメディアとの関係、日本人と英語の付き合い方、英語教科書と英語教授法の歴史などの観点から論じたもので、いずれも日本の英語受容の過程を全体的に捉えたものである。これらの著作は英語受容の大きな流れを把握するのには有益な研究である。

これに対して、本研究では、明治、大正、昭和初期から中期にかけて日本において出版された文法書の中で重要な位置を占め、多くの人々に活用された学習英文法書のいくつかを取り上げ、現代の英語学という純粋に語学的視点から、その利点と不備な点を明らかにし、古い知見を現在の学習英文法に生かす方途について検討する。このような視点からの研究は、国外では言うまでもないが、国内においても今のところ見あたらない。したがって、本研究の特色は、現代の英語学という語学的視座から、学習英文法史という新しい分野に切り込んでいるところにある。将来的には、海外の伝統文法の歴史と日本における伝統文法の歴史の影響関係の研究を行うことも視野に入れている。

２．研究の目的

本研究者は 2006 年に東北大学大学院文学研究科において「英文法：理論と学習文法のインターフェイス」と題するワークショップを開催した。その発表者は、大学の教員に留まらず、専門学校教員、高等学校教員を含めて 14 名であった。この研究会では、現在の英語学研究の成果を学習英文法にどのように取り入れるか、専門学校ではいかなる英語教育が行われているか、高等学校、特に SELhi 指定校の英語教育の取り組みはどのようになっているかなどについて報告・議論がなされた。その成果は『英文法と学習文法のインターフェイス』（中村捷・金子義明編、東北大学大学院文学研究科、2007 年）として出版されている。その中で本研究者は「学習文法の解体と再生―不定詞の場合」を発表した。この発表は現在使用されているある学習英文法書の不定詞の記述方法について論じ、学習者にとってより理解しやすい記述とはどのようなものかを生成文法の視点から追求した論考である。

さらに、もう一つの研究として、今から約 100 年前の 1912 年（大正元年）の出版である市河三喜著『英文法研究』（研究社）についての論考を発表した。この発端となったのは、斎藤が上掲書の中で述べている「誤解されることを覚悟でやや強い言葉を使えば、英文法研究が「象牙の塔」に持ち込まれることになった契機の一つが市河の『英文法研究』にあったと考えることができる」という一文である。市河の本は学習英文法書ではないが、学習英文法書に与えた影響は極めて大きいものがあるので、本研究の準備段階として検討しておいたものである。

このような準備段階を通して本研究者が常に問題として意識していたことは、現在の英語教育における文法軽視の風潮である。ことばは一定の約束事（文法）に従って運用されているのであるから、この約束事を軽視してことばによるコミュニケーションは成り立たない。このような自明のことも当然のこととして受け容れないような英語教育が正しい方向に向かっているとは考えられない。日本で英語が最も輝いていた時代は明治である（福原麟太郎）。そして英語のできる日本人が最も多くいたのもこの時代である。そしてこの時代には内容の優れた程度の高い文法書が存在した。それはどのような内容であり、それを現代の英語学習に生かす方法はないかを探ることが課題である。

以上のことから明らかなように、本研究の目的は

(1) 生成文法の視点から現行の学習文法の不適切な点を正し、より適切な文法記述の方法を提示すること、

(2) いまや文化遺産となっている日本の碩学の残した文法研究の価値と影響を明らかにし、現代の英語教育に還元する方途を探ること、

(3) さらにそのために必要な作業として過去の文法研究の成果を現代に蘇らせること、

の三点である。

３．研究の方法

研究は単独で行ったが、単独で行う利点は、視点が一定になり研究に一貫性が保たれることである。一方、弱点は、調査すべき資料（学習英文法書）が量的に限定されることである。本研究では前者の利点の方が後者の弱点に優ると判断した。

本研究では、日本の英語教育に多大な影響を与え、現在の学習英文法の基礎を作り上げた斎藤秀三郎の『実用英文典』（明治時代）、細江逸記『英文法汎論』（大正・昭和時代）、市河三喜『英文法研究』（大正・昭和時代）の三つの研究を精査し、その特徴と日本の学校英文法に与えた影響を探ったが、その検討の中心事項は次のものである。

(1) 全体の構成と各章の内容の適切さ
(2) 文法的説明の方法とその記述方法
(3) 文法概念の扱い方
(4) 学習者に対する配慮
(5) 練習問題の出題方法など

全体の構成と内容に関しては、学習文法としての枠組みとして適切であるか、含まれている内容が適切であって不自然に高度な内容が含まれていないかどうかを検討の対象とした。文法的説明の方法およびその記述方法

に関しては、文法事項が正しく認識されてわかりやすい記述になっているかどうかを検討した。例えば、この時代の学習文法には句の概念が欠落しているし、範疇と機能の混同が見られ、それに伴って文法事項の説明や記述に問題が生じていることが多い。また不必要な文法概念の使用も見られる。文法書に関してあまり検討されることのない練習問題の内容やその提示方法についても検討した。例えば、現在の学習英文法書できわめて頻繁に見られる穴埋め問題は古い学習英文法書にはほとんど見られない。日本語を英語に、あるいは英語を日本語に直す翻訳作業は英語を使う際に必ず出会う状況であるが、穴埋めなどの問題は英語を運用する際には起こりえない事態である。古い学習英文法書は、このような練習問題の無意味さを明快に示している。

次に具体的方法について述べる。斎藤文法（英文）については、4 巻総頁数 1092 頁からなる内容のほぼ九割を翻訳し、例文の中で理解し難いものには訳文を添え、いまや古い用法となっているものには〈古用〉と明記し、現代においても使用できる翻訳となっている。内容については適宜現代言語学の視点から見て建設的であると思われるコメントを加え、さらに現代の英文法で参考にすべきであると考えられる点を積極的に指摘した。そのような点として、日英比較の視点、教育的配慮の視点、英語を外国語とする日本人学習者からみて注意すべき語法に関わる視点から見た事柄がある。

日英語比較の視点では、例えば、many, some などの存在量化子を「多く（の者）が〜」と訳すのではなく、「〜（する者）が多い」と述語に訳すべきあるという指摘がその一例である。教育的視点としては、*Get* it *ready*（用意せよ）、*Keep* it *ready*.（用意しておけ）のように一見平凡と思われる例に適切な訳をほどこし、適切な例の対を比較対照することによって違いを分かりやすく説明している。語法に関わる例としては、「〜から始まる」の日本語に対応する英語表現の begin *at* that time と date *from* that time の間に見られる前置詞選択の違いように、適切な対比を示すことによって語法の違いを提示し、学習者の便を図っている。

細江文法についても同様の検討を行った。『英文法汎論』（約 450 頁）の内容を 210 頁にまとめ、現代の英文法で利用すべき情報の整理と現代の英文法に与えた影響と負の側面について論じた。市河文法については、扱われている項目の中から現代言語学の視点から見て興味のある項目のいくつかを取り出し、専門的な言語学的評論を加え、その内容が現代言語学の視点から見たときにどのような意義をもっているかを論じた。

４．研究成果

本研究者は以前から生成文法の成果を英語教育に生かす必要性を強く感じていたので、そのような視点から 2009 年には『実例解説英文法』（開拓社）を出版し、さらにそれ以前には『英文法と学習文法のインターフェイス』（中村捷・金子義明編、東北大学大学院文学研究科、2007 年）を出版している。このような研究を背景として、本研究では次の二冊の報告書をまとめた。

(1) 伝統文法の系譜（一）斎藤秀三郎『実用英文典』（427 頁）
(2) 伝統文法の系譜（二）細江逸記『英文法汎論』・市河三喜『英文法研究』（256 頁）

前者は日本の学校文法の枠組みを決定したと言われる斎藤文法について、その内容を現代の視点から詳細に検討・評論し、斎藤の略歴を付したものである。後者の細江文法は日本の英語教育で現在でも盛んに用いられている 5 文型の概念を日本に定着させたといわれるものである。5 文型自体は範疇と機能の混同に基づいて英語の語順を規定してる点で問題の多い概念であるので、それに対する批判的検討を加えた。市河文法は日本で初の科学的文法というのが一般的評価であるがそれが妥当であるかどうかについて論じた。

本研究の意義は現在の文法軽視の風潮に警鐘を鳴らし、語学学習における文法の重要性を知らせしめる点にある。歴史は過去を振り返るためだけのものではなく、今後進むべき道を見つけ出す道標となるものである。わが国の英語学習者がどのような文法を学んできたかを振り返り、その足跡から新しい知見を得て、それを現在の学習英文法に生かすことが本研究の目的であり、意義である。本研究ではその基礎作業として日本の伝統的英文法の内容を現在の学習者に提供できるような形にまとめ、その内容について詳細な検討を加えた。その結果、伝統的文法をそのまま引き継いでいる現在の学習文法には範疇と機能の混同に基づく混乱が見られること、句の概念が正しく理解されていないことから生じる混乱も見られることを指摘した。また Onions によって提唱され、細江によって日本の英語教育界に定着したとされる 5 文型の概念も機能と範疇の混同によるものであるので、速やかに排除されるべきものであることを提案した。

研究の目的は次のような形で達成されている。

(1) 生成文法の視点から現行の学習文法の不適切な点を正し、より適切な文法記述の方法を提示することに関しては、それぞれの文法の内容を記述する中で報告書に記載した。
(2) 文化遺産となっている日本の碩学の残

した文法研究の価値と影響を明らかにし、現代の英語教育に還元する方途を探ることに関しては、それぞれの文法が現代の学習文法に与えている影響を指摘し、その功罪を明らかにした。
(3)過去の文法研究の成果を現代に蘇らせることについては、報告書の形で実を結んでいる。これらは近い将来出版したいと考えている。
　今後の課題として、Sweet, Jespersen, Curme などの海外の伝統文法家の検討及びもっと広範囲にわたる学習文法の歴史を検討したいと思っている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
①中村　捷「ことばの仕組みと言語教育」『語彙と文法の間』（東洋英和女学院大学英語研究会）2011、101－128、査読あり。

〔図書〕（計２件）
①中村　捷（編）『語彙と文法の間』（東洋英和女学院大学英語研究会、2011）
②中村　捷「句構造の重要性」『最新言語理論を英語教育に活用する』（藤田ほか編、開拓社）2012、2－11、査読あり。

６．研究組織
(1)研究代表者
　中村　捷（NAKAMURA MASARU）
　東洋英和女学院大学・国際社会学部・教授
　研究者番号：20004088

(2)研究分担者
　　（　　）

　研究者番号：

(3)連携研究者
　　（　　）

　研究者番号：